

參考太平記

卅八

庫 文 閣 内		
一 函	四	三 六 〇
一 架	一 冊	〇 號
		和 書 類

和 書 門		
四 冊	九 架	三 〇 三 六 〇
冊	架	函 號
		類

内 閣 文 庫	
番 號	和 36360
冊 數	41(39)
函 號	167 76



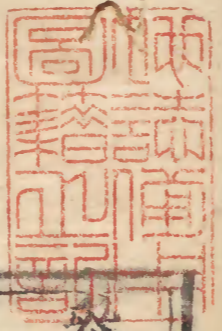
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





参考太平記卷第三十八目錄

彗星客星 附湖水涸事

諸國宮方峰起 附備前軍并桃井直常越中軍事

九州探題足利氏經下向事 此段除李將軍陣中禁女事

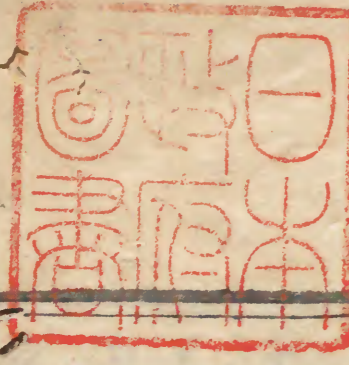
菊池少貳大友軍事

畠山兄弟楯籠修禪寺城 附遊佐入道自害事

細川清氏討死 附西長尾城没落事

和田楠與箕浦次郎左衛門軍事

大元軍事 今除之



卷第三十八目錄

大正元年... 皇... 御宇... 守屋佛法ヲ亡サントセシ時始テ見ヘ...

參考太平記卷第三十八

常陽水戸府

魯齋今井弘濟將興甫 考訂
著軒内藤貞顯仲微甫 重校

彗星客星 附湖水涸事

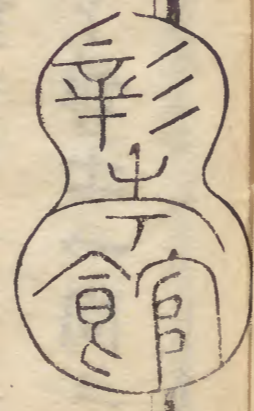
康安二年 南朝正平十七年 北朝改元貞治 二月二都ニハ彗星客

星同時ニ出タリトテ天文博士トモ内裏ヘ召レ

テ吉凶ヲ占ヒ申ケリ客星ハ用明天皇 欽明皇帝

皇御宇ニ守屋佛法ヲ亡サントセシ時始テ見ヘ

タリケルヨリ今ニ至テ十四箇度 考史籍所載自用明帝元



年。至。康安二年。客星出現。凡二十三度。然倭漢候見。必有異同。下倣之。其内二度ハ祥

瑞ニテ。十二度ハ大凶ナリ。彗星ハ皇極天皇御宇ニ

皇極帝者。敏達帝孫。名寶。新 豐浦大臣ノ子。蘇我入

淳王ノ女也。重祚曰齊明天皇。 鹿力亂ヲ起シテ。中臣大兄皇子

敏達帝皇子。押坂 名。麻呂古。今為中并中臣鎌子ト合戰ヲシタリシ

臣姓者。恐非也。 時鎌子者。御食子。卿子。一名鎌足。後改

タリシヨリ今ニ至マテ。八十六箇度。始テ此星出

年。至。康安二年。彗 一度モイマタ災難ナラスト云

事ナシ。尤天下ノ御慎ニテ候ヘシト。博士一同ニ

勘申ケレハ。諸臣皆色ヲ失テ。サレハヨ此亂世ノ

上ニハ。實モ世界國土カ金輪際ノ底ヘ落入カ。然

ラスハ異國ノ蒙古寄來テ。日本國ヲ擊取カニテ

コソアラメ。サル事有マシキ世トモ覺スト。面ケ

申合レケリ。誠ニ天地人ノ三災同時ニ出來ヌト

覺テ。去年康安七月ヨリ歷代皇紀。皇年代畧記。及

今云。七月日々ニ二三度ノ地震モイマタ休ス。又今

年ノ六月ヨリ。同十一月ノ始迄旱魃シテ十一月

本作十五穀モ登ス。草木モ枯萎シカハ。鳥ハ墾ヲ

失ヒ。魚ハ泥ニ息ツクノ三ナラス。人民共ノ飢死
ヌル事。所々ニ數ヲ知ス。此時近江湖モ。三文六尺
天正本作^レ乾タリケルニ。様々ノ不思議アリ。白髭
四五尺明神ノ前ノ澳ニ 天正本作^レ二人シテ抱許ナル檣
木ノ柱ヲアハヒ一丈八尺ツ、立並ヘテ。二町餘
ニ渡セル橋見ヘタリ。古人ノ語り傳ヘタル事モ
ナシ。古キ記録ニモ載ス。是ハ何様龍宮城ノ道ニ
テツ有ラント云沙汰シテ。見ル人日々ニ羣集セ
リ。又竹生嶋ヨリ 天正本作^レ箕浦迄 天正本云ヤ水ノ
高嶋

上三里 西源院本 瑪瑙ノ如クナル切石ヲ。廣二丈
許ニ平ニ疊連テ。二河白道モ角ヤト覺タル道
一通リ現シ出タリ。是モ如何様龍神ノ通路ニテ
ソ有ラントテ。踏テハ渡ル人ナシ。只傍ノ浦ニ船
ヲ浮ヘテ。見ル人市ノ如クナリ。此湖七度迄桑原
ニ變セシヲ我見タリト。白髭明神。大宮權現ニ向
テ仰ラレケルト云。古ノ物語アレハ。左様ノ桑原
ニヤナラニスラント。見ル人怪シニ思ヘリ。天地
ノ變ハ既ニ如此。人事ノ變又サコソアラニスラ

卷之三
四

ムト思フ處ニ。國々ヨリ早馬ヲ打テ。官方蜂起シ

タリト告ル事。曾テ休時ナシ。

諸國官方蜂起。附備前軍。并桃井直常越中軍。

山陽道ニハ。西源院。天正本。作山陰。按伯耆屬山陰。

則所謂山陰。同年六月三日。二院。西源院。天正本。作

山陽共可也。六月二十七日。北條家。南山名伊豆守時氏五千餘

都本。作七月二十七日。騎ニテ。伯耆ヨリ美作院莊へ打越テ。國々へ勢ヲ

差分ツ。先一方へハ。時氏子息左衛門佐師義ヲ

作右。下。大將ニテ二千餘騎。備前備中兩國へ發向

ス。一勢ハ備前仁堀ニ。西源院本。陣ヲ取テ。毛利家。

云。一方へハ。山名右衛門佐舍弟彈正少弼義理。二

千餘騎。備前備中へ發向ス。義理ハ七百餘騎引分

テ。備前仁堀ニ。敵ヲ待ニ。其國守護松田。天正本有。

陣ヲ取云々。河村福林寺。浦上七郎兵衛行景等。皆無勢ナレハ。

出合テハ叶ハシトヤ思ヒケシ。又讚岐ヨリ細川

右馬頭頼之。近日兒嶋へ推渡ルト聞ユルヲヤ相

待ケシ。皆城ニ楯籠テ。イマ夕曾テ戰ハス。一勢ハ

多治目備中守。多治目。金勝院。楯崎ヲ侍大將ニテ

本作多治見。本

千餘騎千。天正本備中、新見へ打出タルニ。秋庭三

郎西源院本作多年拵スレテ。水モ兵糧モ卓散多

ナル松山城へ。多治目、檜崎ヲ引入シカハ自秋庭

此。天正本不出當國守護越後守師秀戰フヘキ様ナクシ

テ。備前、徳倉城へ引退ク刻天正本云。一方へハ多

百餘騎ヲ相添テ。備中、新見ニ陣ヲ張。當國守護越

後守師秀、秋庭三郎諸共ニ。得藏松山城ニ引籠ル。

云。郎從赤木父子二人落止リ思フ程戰テ。遂ニ討

死シテケリ。是ニ依テ敵勝ニ乘。國中へ亂入テ。勢

ヲ差向差向攻出スニ。一儀ヲモ云ヘキ様ナケレ

ハ國中以下至此國人一人モ從ヒ附スト云者ナ

シ。只陶山備前守計今川家。毛利家。金南海ノ端

ニ添テ。僅ナル城ヲ拵テ。將軍方トテハ殘リケル。

備後へハ富田判官秀負カ子息彈正少弼直貞今

家本作真貞八百餘騎。出雲ヨリ直ニ國中へ打出タル

ニ。江田廣澤三吉ノ一族馳著ケル間。程ナク二千

餘騎ニナリニケリ。富田其勢ヲ合テ。宮下野入道

カ城ヲ攻ントスル處ニ。石見國ヨリ。足利左兵衛

佐直冬。五百騎許ニテ。富田ニカヲ合セント。備後

宮内へ出ラレタリケルカ。禪僧ヲ一人。宮下野入道ノ許へ使ニ立テ仰ラレケルハ。天下ノ事時刻到來シテ。諸國ノ武士。大畧御方ニ志ヲ通スル處一。其方ヨリ曾テ承ル旨ナキ間。遮^{カサ}テ使者ヲ以テ申ナリ。天下ニ人多シトイヘトモ。別シテ憑^{タカ}思ヒ奉ル志深シ。今若^モ御方ニ參シテ。忠ヲ致サレ候ハハ。關^カ所分已下ノ事ニ於テハ。每事所望ニ從フヘシトソ宣ヒ遣サレケル。宮入道道山^{北條家南都本。作道仙。下}先^ニ城へ使者ノ僧ヲ呼^ヒ入^レテ。默^シ心ヲ調^ヒ禮儀ヲ厚^ク

クシテ對面アレハ。使者ノ僧。今ハカフト嬉^シク思フ處ニ。彼禪門道山。僧ニ向テ申ケルハ。天下ニ一人モ宮方ト云人ナク成テ。佐殿モ憑^レ方ナク成セ給ヒタラン時。サリトテハ憑^レソト承ラハ。若^モ憑^レテ進ラスル事モヤ候ハンスラン。今時近國ノ者共多ク佐殿ニ參リテ。勢附セ給フ間。當國ニ陣ヲ召レテ。參^レト承ランニ於テハ。エユソ參リ候マシケレ。憎^シ其儀ナラハ。討テ進ラセヨトテ。御勢ヲ向ラレハ。尸^カハ縱^ニ御陣ノ前ニ曝サルトモ。魂

ハ猶將軍ノ御方ニ留リテ。怨ヲ泉下ニ報セシ事
ヲ計ヒ候ヘシ。抑加様ノ使ナトニハ。御内外様ヲ
云ス。然ヘキ武士ヲコソ立ラル、事ニテ候ニ。僧
體ニテ使節ニ立セ給フ條。心得カタクコソ覺テ
候ヘ。文殊佛ノ御使ニテ。維摩ノ室ニハ。玄奘ノ大
般若ヲ渡サントテ。流沙ノ難ヲ凌キシニハ様易
テ。是ハ無慚無愧無道心ノ御舉動ニテ候ヘハ。僧
聖ト申マシ。御首ヲ懸テ路頭ニ懸度候ヘトモ。今
度計ハ別儀ヲ以テ赦シ申ナリ。向後懸ル使ヲシ

テ。生テ歸ルヘシトナ覺シテ。御分誠ニ僧ナラハ。
懸ル不思議ノ事ヲハヨモ仕給ハシ。只此城ノ案
内見ニ為ニ。夜討ノ手引シツヘキ人カ。貌ヲ禪僧
ニ作立ラレテツ。是ヘハオハシタルラン。ヤ、若
黨共。此僧ツレテ城ノ有様能ク見セテ後。城戸ヨ
リ外ヘ追出シ奉レトテ。後ノ障子ヲアラ、カニ
引立テ内ヘ入ハ。使者ノ僧今ヤ失ハル、ト。膽心
モ身ニツハテ。匍々逃テツ歸リケル。此使歸ラハ
左殿定テ寄給ハシスラン。先スル時ハ人ヲ制ス

ハニ利アリ。逆寄ニ寄テ追散セトテ。子息下野次
即氏信ニ。五百餘騎ヲ差副。佐殿ノ陣ヲ取テオハ
シマス宮内へ推寄。懸立懸立攻ケルニ。佐殿ノ大
勢共。立足モナク打負テ。散々ニ皆成ニケレハ。富
田モ是ニカヲ落シテ。己カ本國へソ歸リニケル。
直冬朝臣。宮入道ト合戦ヲスル事其數ヲ知ス。然
共直冬一度モイマタ打勝給ヒタル事ナケレハ。
云甲斐ナシト思フ者ヤシタリケニ。落書ノ歌ヲ
札ニ書テ。道ノ岐まニソ立タリケル。

直冬ハイカナル神ノ罰ハチニテカ。宮ニハサノ三
怖オホテ逃タラン

侍大將ト聞ヘシ森備中守モ 森。西源院
本作。毛利。佐殿ヨリ

前ニ逃タリト披露アリケレハ。高札ノ奥ニ

楯ノ葉ノ 楯。毛利家。金勝院。西
源院。天正本。作。楯。ユルキノ森ニイ

ル鷲ハ。ミヤマオロシニ音ヲヤ鳴ナラン

但馬國へハ。山名右衛門佐。舍弟治部大輔 按。系圖。
毛利家。

天正本。作。中務。
為得。按。名。氏。冬。小林民部丞ヲ侍大將ニテ二千餘

騎。大山ヲ經テ。播磨へ打越ントテ出タリケルカ。

但馬國守護仁木彈正少弼

按、賴勝嘗從義長、既而逃丹後、不知何時又屬

將軍安良十郎左衛門將軍方ニテ楯籠タル城。イニ

夕落サリケル間長九郎左衛門尉毛利家。天正安本。無九郎字

保入道信禪已下ノ宮方トモ。我國ヲ差置テ他國

へ越ル事ヲ得ス。サラハ小林カ勢計ニテモ毛利家。天

正本。小林カ上載。山名中務大輔。播磨へ打越ント企ル處ニ。赤松掃

部助直頼大山ニ城ヲ構テ。但馬ノ通路ヲ差塞キ

ケル程ニ。小林難所ヲ支ラレ。丹波へソ打越ケル。

丹波ニハ當國守護仁木兵部大輔義尹按、系圖大輔。毛利家

本作少輔。非也。頼章子。兼テ在國ニテ待懸タル事ナレハ。聽

テ合戰有ヌトコソ覺ケルニ。粗忽ニ軍シテハ。中

中惡カリヌトヤ思ハレケン。和久郷ニ陣ヲ取テ

天正本云。和久ニ陣ヲ取テ。京。互ニ敵ノ懸ルヲソ

相待ケル西源院本云。義尹イニ夕戰ハニトモ。世

ニ敵ノカ、丹波ハ京近キ國ナレハ。暫モ差置へ

キニアラス。急大勢ヲ下シテ。義尹ニカヲ合ヨト

テ。若狹守護尾張左衛門佐入道心勝尾張。天正本

家本。尾張上。有石橋字。二說共為得本。文及諸異本。第三十七卷。尾張左衛門佐氏頼道世段云。氏頼道

世^ノ後。道心不^レ怠。出家終^リ身。而今重^ニ出^ル於此。者相^レ齟齬。毛利家。天正本^ニ作石橋左衛門佐入道者。為得^ル按^テ園太曆。觀應二年七月二十九日。今曉左衛門佐和義出家云々。詳出第三十卷尊氏兄弟和睦段。遠江守護今川伊豫守。三河守護大島遠江守。天正本作新田左衛門佐義高。毛利家本作大島遠江守。三人^ニ三新田義高。而此下三人。作四人者。恐非也。三箇國ノ勢ヲ相副^ツテ三千餘騎。京都ヨリ差下サ。ル。其勢已ニ丹波篠村ニ著^キシカハ。當國ノ兵共。心ヲ兩方ニ懸テ。何方ヘカ附^ルニシト思案シケル者共。今ハ將軍方ヲ強^クランスラント見定テ。我先ニト馳附ケル程ニ。篠村ノ勢ハ日々ニ増テ。程ナ

ク五千餘騎ニ成ニケリ。山名カ勢ハ。纔ニ七百餘騎。國遠クシテ兵糧乏^クシク。馬人疲レテ城ノ構密^キシカラス。此下迄桃井直常之上。天正本不出。而角尺云。山名小林。乏於運送。因歸國。云云テハ如何堪^ルヘキ。聞落ニソセスラント覺ケル處ニ。小林右京亮。西源院本作民部丞。按此上諸本竝作民部丞。似齟齬伯耆國ヲ出シヨリ。今度天下ヲ動ス程ノ合戰ヲセスハ。生テ再^ニ本國ヘ歸ラシト。申切テ出タリシカハ。少モ騷^ルヘキニ非ス。一所ニテ討死セント。氣ヲ勵^ムシク一ニスル兵共。神水ヲ飲テ。已ニ篠村ヲ立

一聞シカハ。何クニテモ廣三へ懸合テ。組打ニ討
 ント議シケル間。篠村ノ大勢是ヲ聞テ。却テ寄ラ
 レヤセンスラント。二日路ヲ隔タル敵ニ恐レテ。
 一足モ先へハ進マス。木戸ヲ構へ。逆茂木ヲ引テ。
 用心嚴シクテハ居タリケレトモ。小林兵糧ニツ
 マリテ。又伯耆へ引退ケレハ。御敵ヲハ早追落シ
 テ候トテ。氣色ハウテソ歸洛シケル。越中ニハ。桃
 井播磨守直常此下天正本説甚簡省與
 本文不同詳出下可合見信濃國ヨ
 リ打越テ。舊好ノ兵共ヲ相語フニ。當國守護尾張

大夫入道ノ代官。鹿草出羽守カ國ノ成敗漫ナル
 ニ依テ。國人舉テ是ヲ背ケルニヤ。野尻井口長澤
 倉光ノ者共西源院本
 不載澤直常ニ馳附ケル程ニ。其勢
 千餘騎ニ成ニケリ。桃井驥テ勢ニ乗テ。國中ヲ押
 ニ手ニサハル者ナケレハ。加賀國へ發向シテ。富
 樫ヲ攻ントテ打出ケル。能登加賀越前ノ兵共是
 ヲ聞テ。敵ニ先ヲセラレシト。相集リテ三千餘騎。
 越中國へ打越テ。三箇所ニ陣ヲ取。桃井ハイツモ
 敵ノ陣イマ夕取ヲホセヌ所ニ。懸散スヲ以テ利

下ル者ナリケレハ。逆寄ニ推寄テ攻戰フニ。越前ノ勢ニ陣先破レテ。能登金勝院本越中ノ兩陣モ全カラス。十方ニ散テソ落行ケル。日暮レハ桃井本ノ陣へ打歸テ。物具脱テ休ケルカ。夜半許ニ些評定スヘキ事アリトテ。此陣ヨリ二里許隔タル井口カ城へ。誰ニモ角トモ知セスレテ。只一人ソ行タリケル。此時シモ能登加賀ノ者共三百餘騎。打連テ降人ニ出タリケルカ。執事ニ屬シテ。大將ノ見參ニ入ント申間。同道シテ大將ノ陣へ參

シ。事ノ由ヲ申サントスルニ。大將ノ陣ニ人一人モナシ。近習ノ人ニ尋ヌレ共。何クヘカ御入候ヌラン。イマ夕宵ヨリ大將ハ見ヘサセ給ハヌナリトソ答ケル。陣ヲ並ヘタル外様ノ兵共是ヲ聞テ。サテハ桃井殿落ラレニケリト騒テ。我モ何クヘカ落行マシト。物具ヲ著モアリ捨ルモアリ。馬ニ乗モアリ騎ヌモアリ。ヒタヒシメキニヒシメク間。燒捨タル火。陣屋ニ燃著テ。燎原ノ焰盛ナリ。是ヲ見テ降人ニ出タリツル三百餘騎ノ者共。カラ

心介ガ落行敵トモヲ打取テ。我高名ニセントテ。箠ヲ敲キ闕ヲ作テ。追懸追懸撃ケルニ。返合セテ戦ハントスル人ナケレハ。此ニ追立ラレ彼ニ斬伏ラレ。討ル者二百餘人。生捕百人ニ餘レリ。桃井ハイマタ井口城ヘモ行著ス。道ニテ陣ニ火ノ懸リタルヲ見テ。是ハ何様返忠ノ者有テ。敵夜討ニ寄タリケリト心得テ。立歸ル處ニ。逃ル兵トモ行合テ。息ヲモツキアヘス。只引セ給ヘ。今ハ叶フニレキニテ候ソト申合ケル間カ及ハス桃井モ。共

ニ井口城ヘ逃籠ル。晝ノ合戦ニ打負テ。御服峯ニ逃上リタル加賀越前ノ勢トモ。桃井カ陣ノ焼ルヲ見テ。何トアル事ヤラント恠シク思フ處ニ。降人ニ出テ。心ナラス高名シツル兵共三百餘騎。生捕ヲ先ニ追立サセ。鋒ニ首ヲ貫テ馳來リ。鬼神ノ如ク申ツル桃井カ勢ヲコソ。我等僅ノ三百餘騎ニテ夜討ニ寄テ。許多ノ御敵共ヲ打取テ候ヘトテ。假名實名事新シク。コトコトシケニ名乗申セ。大將鹿草出羽守ヲ始トシテ。國々ノ軍勢ニ至

迄哀天剛ノ者共カナ。此人々ナクハ。争カ我等カ
會稽ノ恥ヲハ雲カニシト感ゼ又人モ無リケリ。
後ニ生捕ノ敵トモカ。委シク語ルヲ聞テユゾ。サ
テハ降人ニ出タル不覺ノ人トモカ。倒ル、處ニ
土ヲ廻ム風情ヲシタリケルヨトテ。却テ憎ニ笑
ハレケル

○天正本云。桃井播磨守直常。信濃ヨリ起テ。越中
國へ打出。舊好ノ兵ヲ語フニ。野尻井口。長倉光。
播磨守ニ馳加リケル間。聽テ大勢ニ成ニケリ。

桃井其勢ヲ并テ。加賀國へ發向シ。富樫介ヲ攻
ント打立ケル間。能登加賀越前ノ勢共。是ヲ聞
テ。鹿草出羽守ニカヲ合セ。三所ニ陣ヲ張急ニ
拉テ攻戰フ間。桃井終ニ打負テ。井口城ニ引籠
レハ。是ヨリ北國ハ富樫介ニ挑下レ。其儘無為
ニ成ニケリ。云云

九州探題足利氏經下向事
此段除李將軍陣中禁女事
筑紫ニ少貳大友以下ノ將軍方ノ勢トモ。菊池
追々ヘラレテ。己ニ又九州宮方ノ一統ニ成又

ト見入ケレハ。探題ヲ下シテ少貳大友ニカヲ合
 セテハ叶フマシトテ。尾張大夫入道ノ子息左京
 大夫氏經ヲ九州ノ探題ニ成テ下サレケル。左
 京大夫先、兵庫ニ下リテ。四國中國ノ勢ヲ催シケ
 レトモ。附從フ勢モ無リケレハ。サリトテハ道ヨ
 リ引返スヘキニ非ストテ。僅二百四五十騎ノ勢
 ニテ二百。毛利家。北條家。西源院。南都。天正。本。作。一。百。金。勝。院。本。作。三。百。五。十。餘。騎。已ニ纜
 ヲ解ケルニ。左京大夫ノ屋形船ヲ始トシテ。士卒
 ノ小舟共ニ至マテ。傾城ヲ十人二十人載又舟ハ

無リケリ。礮ニ立並テ是ヲ見物シケル者トモノ
 中ニ些チコサカシケナル遁世者ノ在ケルカ。傍タヘ
 ノ人々ニ向テ申ケルハ。筑紫九箇國ノ大敵ヲ滅葉
 サントテ。討手ノ大將ヲ承ル程ノ人ノ。是程物ヲ
 知テハ。何トシテカ大功ヲ成ルヘキ。夫大敵ニ向
 テ陣ヲ張。戰ヲ決セントスル時兵氣ト云事アリ。
 此、兵氣敵ノ上ニ覆オホテ立時ハ。戰必勝事ヲ得。若陣
 中ニ女多ク交テアル時ハ。陰氣陽氣ヲ消故ニ兵
 氣曾テ立上ラス。兵氣立サレハ。縱大勢ナリトイ

トモ勝事ヲ得ストイヘリ

此下載李廣陣中殺女子事而其說虛妄

正史無之大敵ノ國ニ臨ム人ノ兵ヲハ次ニシテ

先ツ女ヲ先立給フ事心得ラレスト難シ申ケルカ

果シテ幾程ナク高崎城ニモ堪ヘス 高崎天正本作高峯非也

淺マシキ體ニテ上洛シ給ヒシカ面自ナクヤ思

ハレケシ。尼崎ニテ出家シテ諸國流浪ノ世捨人

ト成ニケリ

菊池少貳大友軍事

左京大夫巳ニ大友カ館ニ著又ト聞ヘケレハ菊

池肥後守武光敵ニ勢ノ著又先ニ打散セトテ菊

池彦次郎 金勝院本作彦三郎下城越前守宇都宮

岩野鹿子木民部大輔 金勝院本云名貞貞下田帶刀以下勝

タル兵五千餘騎ヲ差副テ 五千今川家本作五探

題左京大夫ヲ 左京大夫カ上毛利家北條攻ニ為ニ

九月二十三日 毛利家本豊後國へ發向ス探題左

京大夫是ヲ聞テ抑我九州靜謐ノ為ニ下サレタ

ル者カ敵ノ城へ寄スシテ却テ敵ニ寄ラレタリ

ト京都へ聞ヘンスル事先武略ノ足サルニ相似

又リサレハ敵ヲ城ニテ相待マテモ有レ。路次

ニ馳向テ戰ヘトテ。探題ノ子息松王丸天正本作

之。倣イマ夕幼稚ニテ。今年十一歳ニ成ケルヲ大將

ニテ。太宰少貳舍弟筑後二郎金勝院天正同新左

衛門尉按第三十三卷菊池合戰段諸本茲載宗像

大宮司松浦一黨都合其勢七千餘騎ニテ筑前國

西源院本作筑後長者原ト云所ニ馳向テ路ヲ遮テソ待

懸タル。同二十七日ニ菊池彦二郎五千餘騎ヲ二

手ニ作り。長者原へ推寄テ戰ケルニ岩野鹿子木

將監南都本下田帶刀已下宗徒ノ勇士三百餘

騎討レテ其日ノ大將菊池彦二郎三所マテ割ヲ

被リケレハ宮方ノ軍勢已ニ二十餘町引退二十

本作三十一北條家西源院南都本作二十餘里恐非也スハヤ打負又ト見ヘ

ケル處ニ城越前守五百餘騎入代テ戰ケルニ少

貳筑後二郎金勝院天正本此上作同新左衛門尉

二人共ニ一所ニテ討レ又少貳家譜云對馬次郎

後次郎春鶴丸於其外松浦宗像大宮司力一族若

長者原戰死云云黨四百餘人討レニケレハ探題少貳

大友二度目ノ軍ニ打負テ。皆散々ニ成ニケリ。菊池已ニ手合ノ軍ニ打勝シカバ。探題ノ勇威モ恐ルハニ足スト侮テ。菊池肥後守武光。新手ノ兵三千餘騎ヲ率シテ。舍弟彦次郎カ勢ニ馳加テ。豊後府へ發向ス。是迄モ猶探題少貳大友松浦宗像カ勢ハ。七千餘騎有ケルカ。菊池ニ氣ヲ吞レテ。懸合ノ合戦叶フマシトヤ思ヒケシ探題ト大友トハ。豊後高崎城ニ引籠リ。太宰少貳ハ岡城ニ楯籠リ。大官司ハ宗像城ニ籠リテ。嶮岨ヲ命ニ憑ケレハ。

菊池豊後ノ府ニ陣ヲ取。三方ノ敵ヲ物トモセス。三ノ城ノ中ヲ推隔テ。今年ハ己ニ三年迄。遠攻ニコソシタリケレ。抑少貳大友ハ大勢ニテ城ニ籠リ。菊池ハ小勢ニテ是ヲ圍ム。菊池カ兵必シモ皆剛ナルヘカラス。少貳大友カ勢必シモ皆臆病ナルヘキニアラス。只士卒ノ剛臆ハ。大將ノ心ニヨル故ニ。九國ハ加様ニ成ケルナリ。

畠山兄弟楯籠修禪寺城。附遊佐入道自害事。筑紫ニハ宮方蜂起ストイヘトモ。東國ハ程ナク

静シヅリ又。去年ヨリ康安元年畠山入道道誓。舍弟尾張守

義深毛利家。天正本。載。舍弟式部。大輔。國。庶。毛利家。本。或。作。義。國。前。後。不。一。作。國。庶。者。非。也。下。効。之。

伊豆修禪寺ニ楯籠テ。東八箇國ノ勢ト戦ケルカ。

兵糧盡テ落方モナカリケレハ。皆城中ニテ討死

セントス。左馬頭殿ヨリ使者ヲ以テ先非ヲ悔テ。

子孫ヲ思ハハ。頸ヲ延テ降參スヘキ由仰ラレケ

ルヲ。誠ソト信シテ。道誓ハ禪僧ニナリ。舍弟尾張

守ハ。伊豆國守護職還補ノ御教書ヲ賜テ。九月十

日今川家。毛利家本。作。十一月十日。北條家。南都本。作。十一月二日。金勝院本。作。九月十一日。西源院

本作十一月二十一日。天降參シタリケルカ。道誓

ハ伊豆ノ府ニ居テ先舍弟尾張守ヲ鎌倉左馬頭

ノ才ハスル箱根ノ陣ヘソ參ラセケル道誓居伊豆府以下。

金勝院本不出

○天正本云。畠山道誓。舍弟義深。其弟國庶堂作義庶。下効。

去年ヨリ修禪寺城ニ楯籠リ。東八箇國ヲ拉

キ。思フ様ニソ戦ケル。サレトモ遙シノ日數ナ

レハ。轉漕ニ疲テ。兵皆死ヲ一途ニ思ヒ定タリ

ト聞ヘシカハ。是ヲ對治セハ。許多ノ御方ヲ亡

スヘシト思案ノ餘ニ。サラハ偽テ招^キ出スヘシ
トテ。左馬頭殿ヨリ御使ヲ以テ仰ラレケルハ。
不義行跡重疊ストイヘトモ。先非ヲ悔。子孫ヲ
思ハハ。兇^クシ脱^キ軍門ニ參ルヘシトテ。伊豆守護
職還補ノ御教書ヲツ成^キレケル。是ニ依テ兄弟
様々評定有テ。此上ハトテ。十一月二十五日。箱
根城ヘツ出ラレケル。舊好ヲ存シ。弓矢ノ名ヲ
執ケル若黨共五百餘人。誠ニ思ヒ切タル體ニ
テ。前後ニ相從タリケル間。左右ナク誅セラル

ヘキ様ソ無リケル。角テ御陣ヘ參ラル。云云下

本

舊好アル人ハ。萬死ヲ出テ。二度見參ニ入事ノ嬉
レサヨナト云テ。一獻ヲ勸メ。此程情ナクアタリツ
ル傍輩ハ。イツレカ媚^コ諛^コテ。言ヲ卑^キクシ禮ヲ厚^ク
レテ。頻ニ追從ヲレケル間。門前ニ鞍^多置^キ馬ノ立止
隙モナク。座上ニ酒肴ヲ置連子又時モ無リケリ。
角テ三四日天正本作^レ經テ後此上舊好人迄此
本不出。而云懸リケレトモ。左馬頭モ諸軍勢モ。イ
テ退散セス。是ハ何トアル事ヤラント。道誓身

ヲ危フ三テ思ヒ九月十八日夜九月十八日。毛利家北條家南都本。

ケル處ニ云ク作リ十一月十八日。天稻生平次。北條家西源院南都本。

正本作十二月五日潜ニ來テ道誓ニ耳語ケルハ降參御免

左衛門平次本潜ニ來テ道誓ニ耳語ケルハ降參御免

ノ事ハ元來出拔ル、事ニ候ヘハ明日討手ヲ向

ラルヘキニテ候ナル。實モ聞ニ合セテ。豊島因幡

守俄ニ陣ヲ取易テ。道ヲ差塞ク體ニ見ヘテ候金勝

院本無聞、豊嶋今夜急何クヘモ落サセ給フヘシ

要道路之文。今夜急何クヘモ落サセ給フヘシ

トソ告タリケル。道誓聞モ敢ス。舍弟式部、大輔ニ

今川家。毛利家。金勝院本。作尾張守。天正本載式部

大輔尾張守二人。按毛利家。金勝院。天正本等。不載

ケルカ。假初二出ル由ニテ。中間一人ニ太刀持セ

中、間。毛利家。天兄弟二人徒歩ニテ其夜先藤澤ノ

正本。作稻生。兄弟二人徒歩ニテ其夜先藤澤ノ

道場迄ノ落タリケル。上人甲斐甲斐敷馬二匹時

衆二人相副テ。夜晝ノ界モナク馬ニ鞭ヲ進メテ

上洛シケルヲハ。知人更ニ無リケリ。舍弟尾張守

義深ハ。箱根ノ御陣ニ有ケルカ。翌ノ夜或時衆ノ

懸ル事ト告ケルニ驚テ。サテハ我モ何クヘカ落

す。ト案スレ共。東西南北皆道塞リテ。落ヘキ

本文此下尾張守義深匿結城陣營而云。屹ト胸シ

道誓義深其逃藤澤云云。與本文不同。

中、間。毛利家。天

正本。作稻生。

兄弟二人徒歩ニテ其夜先藤澤ノ

道場迄ノ落タリケル。上人甲斐甲斐敷馬二匹時

衆二人相副テ。夜晝ノ界モナク馬ニ鞭ヲ進メテ

上洛シケルヲハ。知人更ニ無リケリ。舍弟尾張守

義深ハ。箱根ノ御陣ニ有ケルカ。翌ノ夜或時衆ノ

方モ無リケレハ。結城中務、大輔カ陣屋ニ來テ源西
院本無ヒラニ憑ヘキ由ヲ宣ヒケル。是ヲ隱サ
中務字ニスル事ハ。至極ノ難儀ナレトモ。弓矢取身ノ習。
人ニ憑ミレテ叶ハシト云事ヤ有ヘキト思ヒケ
レハ。長唐櫃ノ底ニ穴ヲアケテ氣ヲ出シ。其櫃ノ
中ニ伏サセテ。數十合昇草連子タル鎧唐櫃ノ跡ニ
夕テ。態早鎌倉殿ノ御馬廻ニ供奉シテ。尾張守ヲハ
夜ニ紛レテ藤澤ノ道場ヘソ送リケル。命程惜ム
ヘキ者ハナカリケリ。此人遂ニハ御免有テ。越前

ノ守護ニ補セラレ越前北條家南都國ノ成敗穩
本作越中非也
ニテ。土民ヲ安セシカハ。鱈ノ淵ヲ去サカ蝗ノ境ヲ出
ル計ナリ尾張守義深在箱根必遊佐入道性阿ハ。
下至此。金勝院本不出
主ノ落ラル、糶コシヲ聽テ知タリケレトモ。暫人ニ
アヒシラヒテ。主ヲ何クヘモ落延サセン為ニ。少
モ騒タル氣色ヲ見セス。碁雙六十服茶ナト飲テ。
サリケナキ體ニテ笑戲テ居タリケレハ毛利家北條家
金勝院南都本云三日即從共モ外様ノ人モ。思守
三夜迄過シケル云々
ヘキ様無リケレ共。遂ニ隱ルヘキ事ナラ子ハ。島

山兄弟落タリト沙汰スル程コソ有ケレ。臆テ討
手ヲ向ラルト聞ヘケレハ。遊佐入道ハ。禪僧ノ衣
ヲ著テ。只一人京ヲ志テソ落行ケル。鬼角シテ湯
本迄落タリケルカ。行合人ニ口脇ナル劊ヲ隠サ
シ為ニ。袖ニテ口覆シテ過ケルヲ。見ル人中ケア
ヤシメテ。帽子ヲ脱セ袖ヲ引ノケ、ル間。口脇ノ
劊隠ナク顯レテ。道ルヘキ様無リケレハ。宿屋ノ
中門ニ走上リテ。自吭カキ放テ毛利家。天正本云。
リテ。近附者二人取テ引寄遊佐中門ニ走上
殺シ。自ラ喉ヲカキ放ツ下。同返ス刀ニ腹切テ。袈

袈引被キテ死ニケリ。江戸修理亮ハ。龍口ニテ生
捕レテ斬レヌ。其外此ニ隠レ彼ニ落行ケル郎從
トモ六十餘人。或ハ搜出サレテ斬レ。或ハ追懸ラ
レ腹ヲ切。目モ當ラレヌ有様ナリ

○毛利家。天正本云。中ニモ譽田六郎左衛門入道
性意ハ。駿河國ニテ逃上リシヲ。守護代怪三囚
テ。禁籠シタリト聞ヘシカハ。子息彌三郎尋行
テ命ニ代ラント懇ニ所望シケルヲ。父ノ入道
全ク我子ニアラスト陳シケルヲ。子息彌三郎

涙ヲ拭テ申ケルハ。御命ニ代ラント申ヲ。親ノ
 慈悲ナレハ歎思召。加様ニバ仰候カ。抑父子ノ
 儀ニテ候ハスハ。懸ル處へ尋參。御命ニ代ラン
 ト申候へキカ。中々還テ愚ナル御事候ヤト申
 ケレハ。警固ノ武士モ是ヲ聞テソ、口ニ涙ヲ
 ツ流シケル。則此由ヲ守護モ申入ケレハ。今川
 入道心省是ヲ聞テ。父子ノ高義ノ哀ニヤサシ
 キ事ヲ感シテ。父子共ニ死罪ヲ赦サレタリ。聞
 人モ袖ヲソ濡シケル。云云

畠山入道兄弟。甲斐ナキ命助リテ。七條ノ道場へ
 夜半許ニ落著タリケルヲ

自此至段尾。天正
本不同。別出于下。

○天正本云。其後畠山入道兄弟ハ。路次仔細ナク
 京著アリテ。七條道場ニ姑隱レ居給ヒシカ。尚
 其憚アリトテ。宇治邊ニ由來ヲ尋。我廬ヲ占テ。
 中々安閑ヲソ樂ニ給ヒケル

此下毛利家本亦
載在本文段末。說

見于 角テ日數ヲ經ル程ニ。上意仔細ナク寛免
下 ノ御沙汰有テ。尾張守義深。式部大輔國熙。召出
 サル、ノミナラス。攝州中島ノ強敵ヲ鎮メ。暫

南國ノ固ニテアリシカ。幾程ナクシテ。越前國

毛利家本作守護職ヲ賜テ。忽ニ絶ントスル一

家ヲ興シ給ヒケル云云 按第三十九卷道朝下

張修理大夫入道道朝據越前時畠山義深任越前守護云云可并見

聖二三日勞リ奉リテ。道ノ案内者少々相副テ。行

路ノ資ナト様々ニ用意シテ。南方ヘソ送ラレケ

ル。道誓暫宇知郡ノ在家ニ立寄テ。楠カ方ヘ降參

ノ綸旨ヲ申テタヒ候ヘト。宜ニ遣サレタリケレ

トモ。楠サシモ許容ノ分ナカリケレハ

○西源院本云。南方ノ公儀ニ。去々年既當山對治

ノ事申請。二十萬騎ニテ關東ヨリ上洛シ。君ヲ

惱シ奉ル大惡人。勢盡テ身ノ置所ナキ儘ニ。降

參申ヲ御免有ハ。何ノ御用ニカ立ヘキトテ。御

許容ナシ。云云

宇智郡ニモ隱レ得ス。都ヘ立歸ヘキ方モナシ。南

都山城脇邊ニ。トアル禪院律院。或ハ山賤ノ柴ノ

庵。賤カフセ屋ノサヒシキニ。袂ノ露ヲ片敷テ。夜

ヲ重又ヘキ宿モナク。道路ニ袖ヲヒロケ又計ニ

參考太平記 卷三十一

テ。朝三暮四ノ資ニ。心有人モカタト。身ヲ苦シメ
タル有様。聞ニ耳冷シク。見ルニ目モアテラレス。
幾程モナク兄弟共ニハカナク成ケルコソ哀ナ
レ。毛利家。北條家。南都本。無。畠山兄弟死之。而。毛
利家本至。段尾載經。尾張守義深。式部大輔國
熙。被赦事等。皆同。天正。人間。榮耀。風前塵。白居易
本。詳出。于上。可并見。
カ作り。富貴草頭露ト杜甫カ作りシモ理カナ。此
人々去々年春ハ。三十萬騎カ大將トシテ。三十萬
本作。二十萬為得。第三十四。南方へ發向シタリシ
卷云。畠山率二十萬云云。
カハ。德風遠ク扇テ。靡カ又草木モナカリシニ。イ

ツレカ三年ヲ過ス。生ナカラ恥ヲ曝シテ。敵陣ノ
境ニサマヨヒヌル事。更ニ直事トハ覺ス。此人ニ
出拔レ討レシ。新田左兵衛。佐義興怨靈ト成テ。吉
野ノ御廟へ參タリケルカ。畠山ヲハ義興カ手ニ
懸テ。生ナカラ軍門ニ恥ヲ曝サスヘシト奏レ申
ケル由。先立テ人ノ夢ニ見テ。天下ニ披露アリシ
モ。誤ニテハナカリケリト。今コソ思ヒ知レタレ
細川清氏討死 附 西長尾城没落事
讚岐ニハ細川相摸。守清氏上。細川右馬頭頼之ト

參考太平記 卷三十一

三十一

數月戰ヒケルカ。清氏遂ニ討レテ。四國事故ナク
 静リニケリ。其軍ノ様ヲ傳聞ニ。相摸守四國ヲ打
 平ケテ。今一度都ヲ傾ケテ。將軍ヲ滅シ奉ラント
 企テ。堺浦ヨリ船ニ乗テ。讃岐へ渡ルト聞ヘシカ
 ハ。相摸守カ從兄弟。兵部大輔當作少輔。按各氏春。淡路國ノ
 勢ヲ率レテ淡路。金勝院本。作讚岐。三百餘騎ニテ馳著今三百。
 院毛利家。金勝院本。作五百。其弟掃部助按各信氏。氏春弟。讚岐國ノ勢
 ヲ相催シテ。五百餘騎ニテ馳加ル。小笠原宮内大
 輔小笠原。毛利家本不出。阿波國ノ勢ヲ率レテ。三百餘騎ニ

テ三百。天正本。作千三百。馳著ケル間金勝院本。自掃部助至。此不出。毛利家本。自小
 笠原至此不出。而毛利家北條家。金勝院南都清氏
 本云。此外四國ノ勢共。此彼ヨリ馳加ル云々。
 ノ勢ハ程ナク五千餘騎ニ成ニケリ五千。西源院。天正本。作三
 壬其比右馬頭賴之ハ。山陽道ノ西源院本。作西國。蜂起ヲ
 鎮ントテ。備中國ニ居タリケルカ。此事ヲ聞テ。備
 中備前兩國勢西源院。天正本。作備後。千餘騎ヲ率レ千。毛利
 家。金勝院南都本。作六百。讚岐國へ推渡ル天正異本云。清氏對
 都本。作六百。讚岐國へ推渡ル治ノ御教書成レシ
 カハ。賴之讚岐ニ渡。云々。此時若相摸守敵ノ船ヨリアカラシ
 又ル處へ馳向テ戰ハ。一戰モ利アルニシカリ

シヲ右馬頭飽マテ心ニ智謀有テ。機變時ト共ニ
 消息スル人ナリケレハ。兼テ母儀。禪尼ヲ以テ儀。
 禪尼。西源院。相摸守ノ許ヘ言遣シケルハ。將軍儀羣
 本作使者。小ノ讒佞ヲ正サレス。貴方科ナキ刑罰ニ向ハセ
 給ヒシ時。陳謝ニ言ナクシテ。寇讎ニ恨アリシ事。
 賴之尤其理ニ服シ候キ。サリナカラ自將軍至此。
 出而云。一旦將軍ヲ恨申サレシ故。左大臣殿モ氏尊
 事。其謂ナキニアラス。云々下同。仁木細川。兩家ヲ股肱トシテ。大樹累葉ノ九功ヲ
 光榮スヘシトコソ仰置レ候シニ。一家ノ好ヲ離

テ敵ニ降り。多年ノ忠ヲ捨。戰ヲ致サレ候ハン事。
 亡魂ノ恨苔ノ下迄深ク。不義ノ譏世ノ末迄モ朽
 ヘカラス。賴之苟モ此理ヲ存スル故ニ。全ク貴方
 ト合戰ヲ致ヘキ志ヲ廻サス。既往不咎ト申事候
 へハ。御憤今ハ是迄ニテコソ候へ。枉テ御方へ御
 參候へ。御分國已下。悉日比ニ易ラス申沙汰スヘ
 キニテ候。若又其モ御意ニ叶ハテ。御本意ヲ天下
 ノ反覆ニ達セント思召レ候ハ。賴之カナク四
 國ヲ捨テ。備中へ罷歸ヘク候ト。言ヲ和ケ禮ヲ厚

卷之六十五

クシテ。頻ニ和睦ノ儀ヲ請レケルヲ相摸守心殘
ク信シテ。問答ニ日數ヲ經ケル間ニ。右馬頭中國
ノ勢ヲ待調ヘ。城郭ヲ堅ク拵テ。其後ハ音信モ十
カリケリ。相摸守ノ陣ハ白峯本峯。金勝院右馬頭
ノ城ハ歌津ナレハ毛利家。北條家。西源院。其ノハ
ニ僅ニ二里ナリ天正異本寄ヤスル待テヤ戰フ
ト。互ニ時ヲ伺テ。數日ヲ送りケル程ニ數日。毛利
金勝院。南都。天右馬頭ノ勢大略遠國ノ者共ナレ
正本。作。數月。ハ。兵糧ニツマリテ窮困ス。角テハ右馬頭ハ讚岐

國ニハ堪ヘシト見ヘケル程ニ。結句備前ノ飽浦アヲ
薩摩權守信胤宮方ニ成テ信胤。金勝院。天正本。作。
中既降南方而不詳何。時復屬將海上ニ推浮フ小
軍。此文路如今新降南方者。可疑。
笠原美濃守今川家。天正異本。作。鹽飽十郎。毛利家
相摸守ニ同心シテ。渡海ノ路ヲ差塞ケル間。右馬
頭ノ兵ハ日々ニ減シテ落行相摸守ノ勢ハ國々
ニ聞ヘテ駭シ。只魏將司馬仲達カ。蜀ノ討手ニ向
テ。戰ハテ勝事ヲ得タリケニ。其謀ニ相似タリ。七
月二十三日ノ朝自此迄。新聞。向西長尾城。今川家。
毛利家。金勝院。本。有異說。詳出下。

卷之六十五

七

卷之三

見^可合^右馬頭帷帳ノ中ヨリ出テ。新開遠江守真行
ヲ近附テ宣ヒケルハ。當國兩陣ノ體ヲ見ルニ。敵
軍ハ日々ニ増リ。御方ハ漸クニ減ス。角テ猶數日
ヲ送ラハ。合戰難儀ニ及ヒスト覺ル。是ニ依テ事
ヲ計ルニ。官方ノ大將ニ中院源少將ト云人。西長
尾ト云所ニ城ヲ構テオハスナル。此勢ヲ差向テ
攻ヘキ勢ヲ見セハ。相摸守定テ勢ヲ差分テ城へ
入ヘシ。其時御方ノ勢。城ヲ攻ニスル體ニテ向城
ヲ取テ。夜ニ入ラハ篝火ヲ多ク燒捨テ。異道ヨリ馳

歸リ。懸テ相摸守カ城へ推寄。賴之搦手ニ廻リテ。
先小勢ヲ出シ。敵ヲ欺ク程ナラハ。相摸守縱一騎
ナリトモ。懸出テ戰ハスト云事有ヘカラス。是一
舉ニ大敵ヲ亡ス謀ナルヘシトテ。新開遠江守ニ。
四國中ノ兵五百餘騎ヲ相副路次ノ在家ニ火
ヲ懸テ。西長尾へ向ラレケル。
○今川家。毛利家。金勝院本竝云。新開遠江守真行
開^{金勝院本}。細川右馬頭ノ前ニ來テ申ケルハ
作^{關下}。敵ハ日々ニ増リ。御方
當國兩陣ノ體ヲ見候ニ。

卷之三

三

ハ漸々ニ減シ候。角テ今十日二十日トモ成候
ハ。御陣中ニ一騎モ残ルレトモ覺候ハス。サ
ノ三勢ノスキ候ハ又先ニ御合戰候ハテハ一
定難儀出来ヌト覺候。官方ノ大將ニハ。公家ノ
中院源少將ト申人。西長尾ト申處ニ城ヲ構ヘ
テ居ラレテ候ナル。真行ニ御勢ヲ五百餘騎給
候ヘ。態白晝ニ相摸殿ノ陣ノ前ヲ打通テ。西長
尾城ヘ寄候ハ。相摸殿定テ勢ヲ盡シテ西長
尾城ヘワ合カセラレ候ハニスラン。其時真行

向陣ヲ取テ。西長尾城ヲ攻ニスル由ニテ。夜ニ
入ハ潛ニ異道ヨリ馳歸テ。相摸殿ノ御陣ヘ推
寄。思フ圖ノ合戰一度仕テ。天下ノ安否ヲ定候
ハニト申ケレハ。右馬頭實モ然ヘレト思按シ
テ。七月廿三日午刻ニ。新開遠江守ニ。四國中
ノ勢五百騎ヲ相副テ。金勝院本
不載中國西長尾城ヘ差
向ラル云々
按ノ如ク相摸守是ヲ見テ。敵ハ西長尾城ヲ攻落
シテ。後ヘ廻ラント巧ケル。中院殿ニ合カセテ

ハ叶フマレトテ。舍弟左馬助從兄弟掃部助ヲ兩
大將トシテ。千餘騎ノ勢ヲ西長尾城へ差向ラレ。
新開元來城ヲ攻ニスル為ナラ子ハ。熊日ヲ暮サ
ント。足輕少々差向テ。城ノ麓ナル在家所々焼拂
テ。向陣ヲク取タリケル。毛利家北條家金勝院南
都本云。城ニ對揚シテ。高
ク嶮シキ山ノ岸ニ向城ヲ取云々。城ハ尚大勢ナレハ。哀新開カ寄
テ攻ヨカシ。手負少々射出シテ後。一度ニハツト
懸出テ。一人モ殘サス討留ントク勇ケル。夜已ニ
深ケレハ。新開向陣ニ篝火多燒殘シテ。山ヲ越ル

直道ノ有ケルヨリ引返シテ。相摸守ノ城ノ前。白
峯麓へ推寄ル。金勝院本云。山ヲ越ル直道ノ案内
者ヲ取テ。相摸守ノ陣ノ搦手ヘト
馳向フ云。兼テ定タル相圖ナレハ。同二十四日ノ
々。下同西源院本作二辰ノ刻ニ。細川右馬頭五百餘騎ニ
十三且非也。辰ノ刻ニ。細川右馬頭五百餘騎ニ
テ。搦手へ廻リ。搦手。毛利家金
勝院本。作大手二手ニ分レテ。関ノ
聲ヲノ場タリケル。此城元來鳥毛翔カタキ程ニ
拵タレハ。寄手縦如何ナル大勢ナリトモ。十日二
十日カ中ニハ。容易攻落スヘキ城ナラス。其上新
開西長尾ヨリ引返スト見ヘハ。左馬助掃部助。聽

テ馳歸テ寄手ヲ追拂ハシ事却テ城方ノ利ニ成
ヘカリケルヲ。相摸守ハイツモ已カ武勇ノ人ニ
超タルヲ憑テ軍立餘リニ大早ナル人ナリケレ
ハ。寄手ノ旗ノ手ヲ見ルト均ク。二ノ城戸ヲ開カ
セ。小具足ヲタニモ堅メス。袷ノ小袖引タリテ。
鎧計ヲ取テ肩ニ抛懸テ馬上ニテ上帶シメテ。只
一騎懸出給ヘハ。相從フ兵三十餘騎モ。或ハ頬當
ヲレテ。イマタ兜ヲモ著ス。或ハ籠手ヲ差テ。イマ
タ鎧ヲ著ス。真前ニ裏連タル敵千餘カ中へ破テ

ハ此上諸本皆云。頼之勢五百餘哀剛ノ者ヤトハ
見ナカラ。片皮破ノ猪武者。オコカマシクソ見ヘ
タリケル。實モ相摸守敵ヲ物トモ思ハレサリケ
ルモ理カナ。寄手千餘騎ノ兵共千。北條家。南。都本。
相摸守一騎ニ懸分ラレテ。魚鱗ニモ進マス鶴
翼ニモ圍得ス。此ノ塚ノ上。彼ノ岡ニ打上リテ。馬
人トモニ辟易セリ。相摸守ハ鞍ノ前輪ニ引附テ。
子千頸ニセラレケル野木備前次郎野木。天正本
院本。備前。梶原孫四郎二人カ首ヲ。太刀ノ鋒ニ貫
作。備中。

參考本下記

三四

テ差擧相摸守獲野木梯原唐土天竺鬼界大元ノ

事ハ。國遠ケレハイニ夕知ス。吾朝秋津嶋中ニ生

レテ。清氏ニ勝ル手柄ノ者有トハ。誰モヤハイフ。

敵モ他人ニ非ス。キタナク軍シテ笑ハルナト恥

シメテ西源院本云。秋津嶋ノ中ニ生レテ。清氏ニ

テ只一騎云々只一騎猶大勢ノ中へ懸入給フ。飽マテ馬

強ナル打物ノ達者カ。逃ル敵ヲ追立追立斬テ落

セハ。其鋒ニ廻ル者。或ハ馬ト共ニ尻居ニ打居ラ

レ。或ハ堦ノ鉢ヲ胸板マテ破附ラレ。深泥死骸ニ

地ヲ易タリ。爰ニ備中國住人陶山三郎ト。備前國

住人伊賀掃部助ト。二騎田ノ中ナル細道ヲ。閑ケ

ト引ケルヲ。相摸守追附テ切ント。諸鎧ヲ合テ攻

ラレケル處ニ。陶山カ中間ソハナル溝ニオリ立

テ。相摸守ノ乘給ヘル。鬼鹿毛ト云馬ノ草脇ヲソ

縦タリケル自陶山三郎至此。西源院。天正本不出。

サレケレハ。深泥死骸ニ地ヲ易タリ。爰ニ備中國

住人。真壁孫四郎是コソ相摸殿ヨト見タリケレ

ハ。馳達様ニ長鎧ノ柄ヲ取延テ。放此馬サシモノ

駿足ナリケレトモ。時ノ運ニヤ曳レケン。一足モ

更ニ動カス。スクミテ地ニツ立タリケル。相摸守
 ハ近附テ敵ノ馬ヲ奪ハント。手負タル體ニテ。馬
 手ニツリ立。太刀ヲ倒ニツイテ立レタリケルヲ。
 真壁孫四郎馳寄。一太刀打テ當倒サントスル處
 ニ。相摸守走寄テ。真壁ヲ馬ヨリ引落シ。子チ頸ニ
 ヤスル。人礫ニヤ打ト思案シタル様ニテ。中ニ差
 上テソ立レタル。伊賀掃部助高光ハ。懸合スル敵
 二騎斬テ落シ。鋒ニ餘ル血ヲ笠驗ニテ押拭ヒ。何
 クニカ相摸殿ノオハスラント。東西ニ目ヲ賦ル

處ニ。真壁孫四郎ヲ中ニ提ナカラ。其馬ニ乗ント
 スル敵アリ。穴駱オモタシ凡夫トハ見ヘス。是ハ如何様
 相摸殿ニテソオハスラン。是コソ願フ處ノ幸ヨ
 ト思ヒケレハ。伊賀掃部助。畠ヲスチカヒニ馬ヲ
 真闇ニ馳懸テ。無手ト組テ引カツク。相摸守真壁
 ヲハ右ノ手ニカイ廻テ投棄。掃部助ヲ射向ノ袖
 ノ下ニ壓ヘテ頸ヲカ、ント。上帶延テ後ニ廻レ
 ル腰ノ刀ヲ引廻サレケル處ニ。掃部助心早キ者
 ナリケレハ。組ト均シク抜タリケル刀ニテ。相摸

守ノ鎧ノ草摺ハ子アケ。舉様ニ三刀サス。刺レテ
弱レハ勿返シテ。厩ヘテ首ヲソ取タリケル自レ此上真

壁孫四郎至此今川家。毛利家。北條家。金勝院。南都本。與本文不同。可合見。

○今川家。毛利家。北條家。金勝院。南都本並云。相摸

守ノ馬鎧ヲ急所ニ鏝コメレタレハ。小膝ヲ折

テトウト伏ハ。弓手ニ下立テ。敵ノ馬ヲ奪取テ

乗ント。大手ヲヒロケテ追ハレケルヲ。陶山三

郎馬ヲカヒ折テ。馳違ヒ様ニ。相摸守ノ右ノカ

イナヲ懸スフツト斬テ落ス。馬ニハ離レヌ片

手ハナシ。乗替ノ馬ヤ有ト。後ヲ屹ト顧テ立レ

タル處ニ。伊賀掃部助馳寄テ。無手ト組テ岸ヨ

リ下ヘ轉落サヒ落ル處ニテ相摸守上ニ成テ。掃部

助力首シカ、ント。左手ニテ腰刀ヲ拔ントシ

ケル間ニ。真壁七郎左衛門北條家。南都本。作孫四郎。陶山三

郎。矢野十郎。三騎落重テ。相摸守ヲハ討テケリ。

云云

サレモノ猛將勇士ナリシカトモ。運盡テ討ル、

ヲ。知人更ニナカリシカハ。續テ助ル兵モナシ。森

次郎左衛門ト毛利家北條家西源院南都天正本森作木村金勝院本次作三

木孫七郎行長ト西源院討死シケル外ハ一所ニ

テ討死スル御方モナシ其身ハ深田ノ泥土ニ塗

レテ首ハ敵ノ鋒ニアリ只元曆ノ古木曾義仲カ

粟津原ニテ討レ曆應二年當作曆秋ノ初新田左

中將義貞ノ足羽ノ繩手ニテ討レタリシ二人ノ

體ニ異ナラス此下天正西長尾城へ向ラレタリツ

ル左馬助二十四日ノ夜明テ後新開カ引返シタ

ルヲ見テ毛利家北條家金勝院南都本云相摸守ノ舍弟左馬助ハ敵ノ出抜ケルヲ知ス

昨日ヨリ西長尾城へ向テ新開ト戰ハンスル用

意シテ居タリケルカ二十四日曉ニ成テ新開カ

陣ノ簾幽ニ見ヘケル間人ヲ遣シテ見スルニ新

開ハ引返テ候ヤラシ敵ハ一人モ候ハスト申ケ

ル云々下同是ハ如何様相摸殿御陣ノ勢ヲ外へ分サ

セテ差違フテ城へ寄ントタハカリケルヲ軍今

ハ定テ始リヌラン馳返テ戰ヘトテ諸鎧ニ策ヲ

ソヘテ毛利家北條家南都本千里ヲ一足ニト馳

返リ給ヘハ新開道ニ待受テ難所ニ引懸テ平野

ニ開合セ入替入替戰フタリ互ニ討ツ討レツ東

西ニ地ヲ易南北ニ合ツ別レツ二時許戰テ新開

遂ニ懸負ケレハ。左馬助。掃部助兄弟。勝^{カチ}関^{トキ}三聲揚
サセテ。氣色ハウタル體ニテ。白峯城へ歸給フ。懸
ル處ニ笠驗カナクリ捨テ。袖堯ニ矢少ク射附ラ
レタル落武者トモ二三十騎。道ニ行逢タリ。跡ニ
追著テ。軍ノ様何ト有ケルソト問給ヘハ

○金勝院本云。左馬助千餘騎ニテ馳返リ給ヘハ。
新開イマタ大手ノ軍ノ勝負ヲ知ス。左馬助力
勢ヲ城へ入ス。遮テ路ヲ塞キ相戰フ。互ニ勇ニ
進テ。命ヲ限ト攻合ケルカ。新開終ニ懸負テ。右

往^{ウチ}左^サ往^{ウチ}ニカケ散サル。左馬助。搦手ノ合戰ニ打
勝テ思フ事モナク。相摸守カ城へ。氣色ハウテ
歸リ入ントスル。笠驗カナクリ捨テ。誠ニレホ
レカヘリタル兵共。東ヲ指テ落テ行。左馬助跡
ニ附テ。大手ノ軍如何アリケルソト問給ヘハ。
云云下同

皆泣聲ニテ。早相摸殿ハ討レサセ給ヒテ候ナリ
トソ答ケル。コハ如何トテ城ヲ遙ニ見上タレハ。
敵早入代リヌト覺テ。見サリシ旗ノ紋共。城戸櫓

ノ上ニ幽揚ス。重テ戰ハントスルニカナク楯籠
 ラントスルニ城ナケレハ。左馬助掃部助落行勢
 ヲ引具シテ。淡路國ヘソ落ラレケル。其國ニ志ア
 リシ兵共。此事ヲ聞テ。何シカ皆心變シケレハ。淡
 路ニモ尚タマリ得ス。小舟一艘ニ取乘テ。和泉國
 ヘソ落ラレケル。是ノミナラス西長尾城モ攻ラ
 レ又前ニ落シカハ。毛利家北條家。金勝院南都。四
 天正本無。西長尾城陷事。
 國ハ時ノ間ニ靜リテ。四國。毛利家金勝院本。細川
 作阿波讚岐淡路三國。
 右馬頭ニソ靡キ從ヒケル。

和田楠與箕浦次郎左衛門軍事

南方ノ敵軍和田楠モ。相摸守ニ兼テ相圖ヲ定テ。
 同時ニ合戰ヲ始ント議シタリケルカ。七月二十
 四日相摸守討レテ。四國中。國ハ金勝院本
 不載。四國。大略細
 川右馬頭頼之ニ靡キ從ヌト聞ヘケレハ。日來ノ
 支度相違シテ。氣ヲ損シ色ヲ失テワ居タリケル。
 サモアレ加様ニテ徒ニ日ヲ送ラハ。敵ハ彌勝ニ
 乘テ。諸國ノ御方降人ニナル者アリヌト覺レハ。
 一軍シテ國々ノ宮方ニ氣ヲ直サセントテ。和田

楠其勢八百餘騎ヲ率シ。野伏六千餘人。六千。北條家。南都本。

作六十。恐非也。金勝院本。不載野伏。神崎ノ橋爪へ打臨。天正本云。橋爪へ打臨テ。

大篝ヲ此比攝津國守護ヲハ。佐々木佐渡判官入

道道譽カ持タリケレハ。其身ハ京都ニ在ナカラ。

箕浦次郎左衛門ニ名。俊定。勢百四五十騎附テ。

國ノ守護代ニソ置タリケル。第三十二卷諸本云。其浦次郎左衛門。文

和二年於江州真野浦。催促ノ國人取合テ。其勢僅

ニ五百餘騎。神崎ノ橋二三間焚落シテ。敵川ヲ渡

サハ。川中ニテ皆射落サント。鏃ヲソロヘテ待懸

タリ。和田楠態敵ヲタハカラシメ。神崎ノ橋爪

ト。株瀨ト二箇所ニ打向テ控ヘタレハ。此ヲ渡サ

セシト。箕浦彌次郎西源院。天正本不出。同四郎左衛門。塩冶

六郎左衛門天正本不出。六郎。今川家。毛利家。金勝院本。作次郎。下。劔之。今川家本無。左衛

門。多賀將監西源院本。作。後藤。天正本。木村兵庫允

字。多賀將監左近將監。後藤。天正本。木村兵庫允

泰則木村。今川家。毛利家。北條家。金勝院。南都。天正本。作。上村。而。天正本無。兵庫允。泰則。字。下。劔之。

以下五十餘騎ハ五十。西源院本。作。百。株瀨へ馳向。守護代箕

浦次郎左衛門。伊丹大和守。河原林彈正左衛門河

林。金勝院多芥河石馬允。中白一揆三百餘騎ハ。神崎

寺作。河村。

橋爪へ打臨。橋桁タテハ元來燒落シタリ。株瀬ハ水深
 二。和田楠カ兵トモ。縦タテヤタケニ思シトモ。渡へシト
 ハ見へサリケリ。八月十六日ノ夜半許ニ。和田楠
 元ノ陣ニ尚控へタル體ヲ見セン為ニ。殊カ更カ篝カヲ
 多ク燒タキ續ツケサセテ。是ヨリ二十餘町上ナル。三國ノ
 渡ヨリ打渡テ。小屋野。富松。河原林へ勢ヲ差廻シ
 テ。富松。金勝院。西源院 敵ヲ河へ追ハメント取籠
 本。作。戸。松。下。餓。之。タリ。京勢ハ是ヲ夢ニモ知子ハ。徒ニ河向ニ敵イ
 一々控へタリ。躬ツク口ヒシテ居タル處ニ。小屋

野。富松ニ當リテ。所々ニ火燃出テ。煙ノ下ニ旗ノ
 手數テ多見へタリ。是迄モ尚敵川ヲ越タリトハ思
 モ寄ス。燒亡シハ御方ノ軍勢共ノ。手過テニテフ有シ
 ト油斷シテ。明行儘ニ後ヲ遙ニ見渡シタレハ。十
 餘箇所ニ羣雲立テ控タル勢。旗トモハ。皆菊水ノ
 紋ナリ。サテハ敵ハヤ川ヲ渡シテケリ。平場ノ懸
 合ハ叶フニシ。城へ引籠テ戰へトテ。淨光寺ノ要
 害へ引返サントスレハ。敵ハヤ入代リタリト覺
 テ。勝関トキヲ作ル聲。淨光寺ノ内ニ聞へタリ。是ヲ見

テ中白一揆ノ勢三百餘騎ハ國人ナレハ案内ヲ
知テ何ノ間ニカ落失ケン。一騎モ残留マラス。只
守護ノ家人僅五十餘騎五十。毛利家。天正本。作百。
思ヒ切タル體ニ見ヘテ。二箇所ニ控テ居タリケ
ル二箇所。金勝院。本作三箇所。兩所ニ控タル勢。一所ニ打寄ニ
トシケルカ。敵ノ大勢ニ早中シ隔ラレテ叶ハサ
リケレハ。箕浦次郎左衛門東シ差テ落行ニ。兩方
深田ナル細堤ヲ敵斷切テ是ヲ打留ント。行前ヲ
遮リ。道ヲ要テ取籠ル事。度々ニ及ヘリ。サレトモ

箕浦懸破テハ通り。取テ返テハ戦ヒケルニ西源院本
云。箕浦懸破テ戦ケルニ。死生一云云番ニ河原林彈正
ハ知ス七八騎斬テ落ス。云云。是ヲ見テ。芥河右馬允
左衛門ハ天正本載。寺倉五郎。討レ又。是ヲ見テ。芥河右馬允
スケナフ。西源院本作。右馬允資直。按以訓傳會為各乎可疑。引分レテ落テ
行ントシケルシ。日比ノ口ニハ似又者カナト。箕
浦ニ言ヲ懸ラレ。一所ニ打寄テ相伴フ。箕浦是ヲ
案内者ニテ。數箇所ノ敵ノ中シ道レ出。都ヲ差テ
ソ上リケル。下ノ手ニ控ヘタル者共ハ。落方ヲ失
テ。惘然トシテ居タルヲ

史記 卷之八

○西源院本云。諸人落方ヲ失テ。惘然トシテ居タ
リケル處ニ。箕浦四郎左衛門進出テ申ケルハ。
御方小勢ナリトモ。志ヲ同シテ戰ナハ。日本ニ
雙ナキ弓取ト名ヲ得タル和田楠カ間ニ。一人
モナトカ打取テハ有ヘキト云モ果サル處ニ。
和田カ先懸ノ兵三百餘騎ニテ推寄テ。開シ咄
トソ揚タリケル。佐々木カ勢少モヒルマス擊
テ懸リ。火出ル程戰テ。左右へ颯ト引退ク。始百
騎許ト見ヘシ佐々木カ勢。或ハ討レ或ハ創シ

被リ。散々ニナリケレハ。以上七騎ノ残りケル。
和田楠モ。ヨキ者數多討レケレハ。兩陣暫息ツ
キ居タリケル。云云 下同
木村兵庫允泰則 西源院本作泰範。此 兵共ノ掟面
面存知ノ前ナレトモ。戰難儀ナル時。死ナントス
レハ生^{イキ}生ントスレハ死スル者ニテ候ワ。只幾度
モ敵ノナキ方ヘヒカテ。敵ノ大勢控ヘタラン所
へ懸入テ戰ハンニ。討レハ元來ノ儀。討レスハ懸
拔テ。西ヲ指テ落テ行ンニ。敵モ流石命ヲ捨テハ。

サノ三長追ヲハシ候ハシヤ。云處實モト思ハハ。
恭則ニ續ケヤ人々ト云儘ニ。淨光寺ノ前ニ。百騎
許控ヘタル敵ノ方ヘ。馬ヲ引返シテ歩マセ行。敵
是ヲ見テ。是ハ何様降人ニ出ル者カト。少猶豫シ
テ控ヘタル處ニ。歩立ナル石津助五郎行泰ニ矢
二筋三筋射サセテ。敵ノ馬ノ足些シト口ニナレ
ハ。三騎ノ者トモ。オツト喚テ懸入。百騎許控ヘタ
ル敵。颯ト分レ靡キテ。敢テ是ニ當ラントセス。只
射手ヲ進メテ射サセケル程ニ。箕浦彌次郎討レ

又金勝院本作彌三郎。此同上。本文相齟齬。同四郎左衛門南都本作次郎。此同上。本文相齟齬。西源院本云。木村泰範。我ニ續ケ人々トテ引返

シテ歩セ行。是ハ降人ニ出ルカト楠カ勢少猶
豫シケル處ニ。田上。石澤。杉。芹川ニ。矢二筋射サ
スル程コソ有ケレ。喚テ懸レハ。寄手ノ兵是ヲ
見テ。死狂スルヲテ武者共ナリ。只置テ馬ノ足
ヲ疲カセトテ。小川ノ有ケルヲ前ニ當テ引退。
敢テ戰ハントモセス。散々ニコソ射サセケレ。

去程ニ多賀左近將監ハ馬ノ平頸ヒラケニ太刀斬レテスクミケレハ下立テ歩立ノ者ニヲニ交リ。近附敵ヲ射拂テコソ落行ケレ。箕浦彌次郎ハ犬死セシトヤ思ケシ。和田カ兵ノ群立テ控タル中へ。只一騎懸入ケル。志ノ程ハ猛ケレトモ。十六歳ノ若武者ナリ。敵ハ騎ニ取籠ラレテ討レケリ。同四郎左衛門ハ内兜ニ深手負テ。田中ニ伏タリケルカ。姪オ彌次郎討レケルヲ聞テ。既ニ腹ヲ切シトシケルヲ見テ。堀新右衛門走寄。

取テ引立テ。我ニ劣ラ又大男ノ一縮シニタルヲ鎧ノ上ニカイ負テ。持タル長刀ヲモリキニシテ。尼崎道場迄。只一息ニソ負行ケル。云云下同。鹽冶六郎左衛門六郎今川家金勝院本此上作次郎。今作四郎相齧齧西源院本云。六郎左衛門モ三所迄手負タリ。云云。木村兵庫モ馬ノ平頸草脇ニ所射サセテ西源院本云。馬ヲ深田ノアゼニ下立タリ。スハヤ討レヌト見ヘケルガ。木村兵庫放レ馬ノアリケルニ打乗テ。徒歩カチニ成タル鹽冶ヲ。馬ノ上ヨリ手ヲ引テ金勝院本云。泰則ハナレ馬ニ打騎テ。徒立ニ成タル鹽冶ヲ。

参考大平言 卷三ノ

敵味方ノハナレ馬イカホトモ多キニ打ノセ。馬ノ上ヨリ手ヲ引合。云々下同尼崎へ落

テ行。敵跡ニ附テモ追サリケレハ。道場ノ内ニ一

夜隠レ居テ。翌ノ夜京へツ上リケル自リ此上河原林彈正左衛

門戰死至此。天正本本文甚簡省。與本文不同。可合見

○天正本云。川原林彈正左衛門。寺倉五郎討レケ

レハ。下手ニ控タハ。箕浦次郎左衛門尉。上村兵

庫助。鹽治六郎左衛門尉。ウス卷テ控タハ。敵ヲ

追拂。御方ノ道ヲ開カント。散ケニ行跡ケルニ。

馬ノ平頭三頭斬レヌ者モナカリケリ。四郎左

衛門四郎疑次郎之訛手餘ニ手痛。敵ニ打合テ。堯ノ真額

小手ノハツレ。透間アル程手負テ。馬ニ離ナカ

ラ思フ程戰テ。力盡ヌレハ叶ハス。深田ノ畔ニ

ツ伏タリケル。同彌二郎同所ニテ討死ス。此者

共如此成シカハ。御方兵散ケニナリテ。都ヲ指

テ引歸シケリ。云云下同。本文

和田楠等。只一軍ニ攝州ノ敵ヲ追落シテ。勝ニ乘

トイヘトモ。赤松判官光範信濃彦五郎天正本作兵

兄弟。猶兵庫ノ北ナル多田部城ニ籠テ金勝院本

参考大平言 卷三ノ

四二

兵庫湊河ヲ管領スト聞ヘケレハ。九月十六日石
 堂右馬頭和田楠三千餘騎ニテ。兵庫湊川へ推寄。
 一宇モ残ラス焼拂フ。此時赤松判官兄弟ハ。多田
 部。山路。二箇所ノ_{金勝院本作大}城ニ籠テ。敵懸ラ
 ハ爰ニテ利ヲセント待懸ケルカ。楠如何思ヒケ
 ン。懸テ兵庫ヨリ引返シケレハ。赤松出合ニ及ハ
 ス。野伏少々城ヨリ出シテ。遠矢射懸タル計ニテ。
 ハカハカシキ軍ハナカリケリ。都ニハ同九月晦
 日_{眞治二十三日。公卿補任。皇年代畧記云。依テ兵革實}改元有
 康安二年九月二十三日改元。眞治云々

テ。眞治ト號ス。是ハ南方ノ蜂起サテモヤ靜ニル
 ト諸卿申合レシ故ナリ_{皇年代畧記云。依テ兵革實}
 モ改元ノ驗ニヤ。京都ヨリ武家ノ執事尾張大夫
 入道。大勢ヲ討手ニ下スト聞ヘケレハ。和田楠又
 尼崎西宮ノ陣ヲ引テ。河内國へ歸リ又_{天正本云。和}
 内へ歸ケレハ。其時ノ管領足利修理大夫入道大_{田楠河}
 勢ヲ差下シカハ。國ハ無為ニソ成ニケル云々
 下是ヲ聞テ。山名伊豆守時氏カ勢ノ丹波和久ニ
 居タリシモ。因幡國へヲ引返シケル。今年天下既
 ニ同時ニ亂テ。宮方眉ヲ開キ又ト見ヘケルカ。程

ナク國々静マリケルモ。天運ノイマ夕至ラ又處
トハ云ナカラ。先ハ細川相模守カ。粗忽ノ軍シテ
云甲斐ナク討死ヲセシ故ナリ

大元軍事

此段作者引元滅宋之事評細川
清氏為細川頼之敗死今除之

大元軍事 此段作者引元滅宋之事評細川
清氏為細川頼之敗死今除之
天運ノイマ夕至ラ又處
トハ云ナカラ。先ハ細川相模守カ。粗忽ノ軍シテ
云甲斐ナク討死ヲセシ故ナリ

參考太平記卷第三十分

